

解 説
-----



## 技術開発と品質工学の変遷 (3)

—今井兼一郎ロングインタビュー—

*The Change of Technology Development and Quality Engineering (3)*  
— Long Interview by Kaneichiro Imai —

今井 兼一郎\*

*Kaneichiro Imai*

(聞き手) 矢野 耕也\*\*

*Koya Yano*

この記事は、前々号である2016年6月号に(1)、前号8月号に(2)として掲載されたものの継続で、掲載順序からすると3番目になるが、2008年の2月、「標準化と品質管理」の品質工学の特集(2008年6月号掲載)のために行った対談が元である。話が長時間になったために当時の掲載ではかなり割愛したが、貴重な記録であったことから、日本規格協会の了解を得て、可能な限り未公表の部分を再録した。なおインタビュー時期からして、現在の情勢とは若干異なる部分があることをお断りしておく。また学会誌2007年10月号には「ジェットエンジンから品質工学まで」として、本解説の半年以上前に同様のインタビューを行って記事にしているのを、併せて一読いただければと思う。

(編集委員会)

### 12. サービス・サイエンスとソフトウェア

**今井** 品質工学でもこうやって教えているのだから、学問なのだ。この間(2008年2月開催)のNMS研究会ではどうしてあのような議論(品質工学は学問か)をしたのか。

— (矢野) あれは一種のなぞかけなのだ。

**今井** それはそれでいい。別に言わないが、サービス・サイエンスの議論をマネジメントの中でもっともっとやるとよい。

— 最近サービス・サイエンスという形で、特に文科系の先生が取り上げている。

**今井** 理科系のエンジニアがそれを理解すべきなのだ。なぜかというと、簡単なことでいうと、IBMはハードを売らないわけである。作っていないし、そのソフトも作っていない。しかし、お客がどういうサービスを求めているかということは一生懸命勉

強しているわけだ。それがわかると、裏で日本に発注して、日本の部品で出来たアメリカ製品、とやる。それから、それで競争に勝つためにはいいハードでなければだめだといって、作れと言って、いきなり完成品を作るわけだ。そのような形で話が動いているということだ。

そのような中で、サービス・サイエンスがいかに大事かということはこの前ある人に話した。そうしたら、大変偉い人だけど、まさにそのとおりだという。なぜそんなことを言うのかと思ったら、やはり会社の中で問題になったそうである。これはテレビの話なのだが、マーケットのサービスの人は、テレビをできるだけ軽く薄く作れという。

このように軽く薄く作れという人が一方でいて、マーケットは今後これだとなった。ところが、また別のある人は軽くて薄いのもいいかもしれないけれども、ある程度の重さがあったら映した時にはっきり色も出るし、いろいろなことがはっきり出るほうがいいという意見もあり、みんなでマーケットはどっちだと議論をした。結果として、はっきり映るほ

\* 元(株)IHI

\*\* 日本大学